

題目 関係の継続性が自己開示に与える影響の日米差とその原因—社会生態学的アプローチによる
検討—

氏名 川崎 遥可

指導教員 結城 雅樹

本研究は、関係の継続性可能性の高低が見知らぬ他者への自己開示に与える影響の文化差を検討するとともに、その背景にある自己開示の動機のみカニズムを社会生態学的アプローチから明らかにすることを試みた。これまで、概してアジア人より西洋人の方が親しい友人に対する自己開示が多いことが知られてきたが、先行研究からその文化差が関係流動性によって説明されることが明らかになった。しかし、見知らぬ他者に対する自己開示についてはまだ十分に検討されていなかったため、本研究では関係流動性の異なる日本とアメリカを対象に調査を行った。本研究では、見知らぬ他者を関係の継続可能性が高い相手（近隣住民）と関係の継続可能性が低い相手（旅行者）に分け、関係の継続性が高い場面で、アメリカは関係強化を目的に自己開示度が高まり、関係の継続性が低い場面で、日本は既存の関係への影響や裏切りを懸念し、自己開示度が低くなると予測した。日本人とアメリカ人を対象にしたオンライン質問紙調査の結果、予測に反して日本とアメリカに共通して、関係継続がある条件よりもない条件で自己開示度が高いことが明らかになった。探索的な差得点の媒介分析の結果、予測通り日本では裏切り懸念の、アメリカでは関係強化動機の間接効果が有意であった一方で、予測外の結果として、日本でも関係強化動機の、アメリカでも裏切り懸念の間接効果が有意であり、日本とアメリカで自己開示に作用する動機のパターンが同じであった。